

特集 ～良食味米生産に取り組みます!!～

- ・平成24年産の秋田県産あきたこまちが(財)日本穀物検定協会で行われている食味ランキングにおいて10年ぶりに“特A”を奪還したのは皆様の記憶にも新しいことかと思われます。

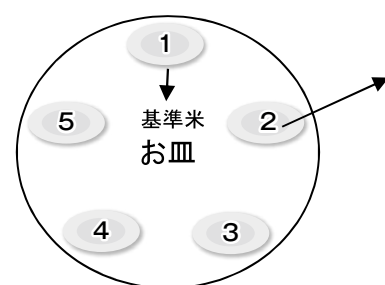
この食味ランキングはお米のおいしさの指標になるだけでなく、米の産地間競争で県内産のお米が有利に立つためにも非常に大切な格付けであります。

今回は、特集として食味ランキングで“特A”を維持するポイントについてまとめます。

①食味官能試験イメージについて

- ・食味官能試験は基準米と試験米を交互に食べ比べる方法で行われ、“香り”、“外観”、“味”、“かたさ”、“ねばり”を評価し、その評価から、“総合”した結果を決定します。

図1 食味官能試験皿イメージ



ポイント

- ・お米をカップでふさいである（香りが逃げないように）。
- ・お米はしゃもじで軽く一杯分の量
- ・①基準米→②→①基準米→③→①基準米→…の順で食べる。

評価基準

- 良 い → 一口で良いと分かる
- やや良い → 二口で良いと分かる
- 普通 → 三口で良いと分かる、もしくは判然としない
- やや悪い → 二口で劣ると分かる
- 悪 い → 一口で劣ると分かる

図2 評価表

	悪い	やや悪い	普通	やや良い	良い
香 り					
外 観					
味	←		基準		→
かたさ					
ねばり					
総 合					

②食味官能試験米の炊飯について（品種：あきたこまち）

- ・食味官能試験を行うお米は精米時の水分で14.5%以上の水分があるものは通常の炊飯で行います。

ただし、水分が14.5%以下の場合は、お米の水分の低さに応じて“加水”して炊飯します。“加水”された場合、あきたこまちにとって、非常に不利になります…→why?(なぜ?) Answer→あきたこまちは他の品種に比べ、水を吸収する力が強いからです。加水されると、多くの水分を吸収してしまい、“べちゃべちゃなお米”に仕上がってしまいます。

結論→①刈取は出穂日からの積算気温で950～1050℃（あきたこまちの場合）の間で収穫することが良食味米づくりの基本です（やや早刈りすると香りのポイントが高まります）。

→②乾燥調整時の仕上り玄米水分が“14.5～15.0%”を基準に調整することが大切になります。

**食味を上げる稲づくりには肥料設計や栽培技術の他に、“刈遅れをしないこと”
“仕上げ（調整）”に気を配ることが大切です!!**



No.7

農業技術情報



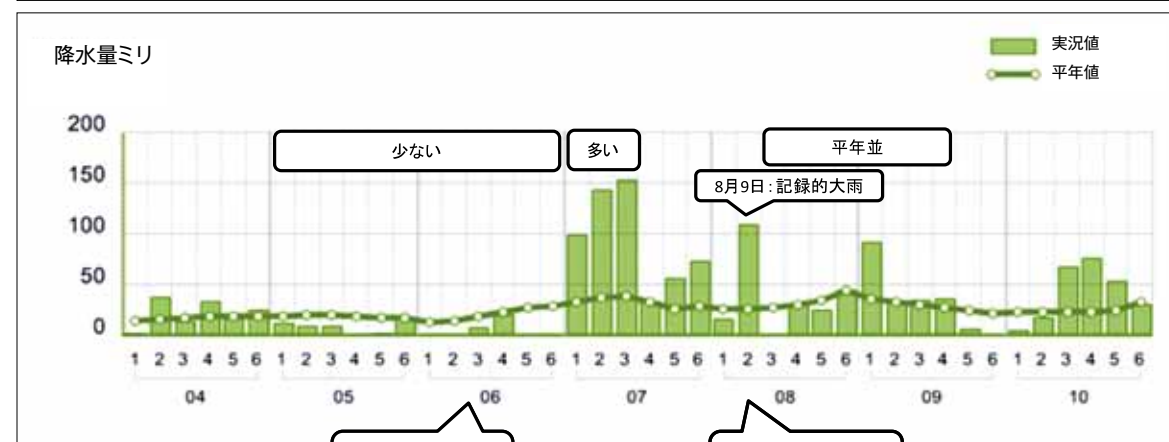
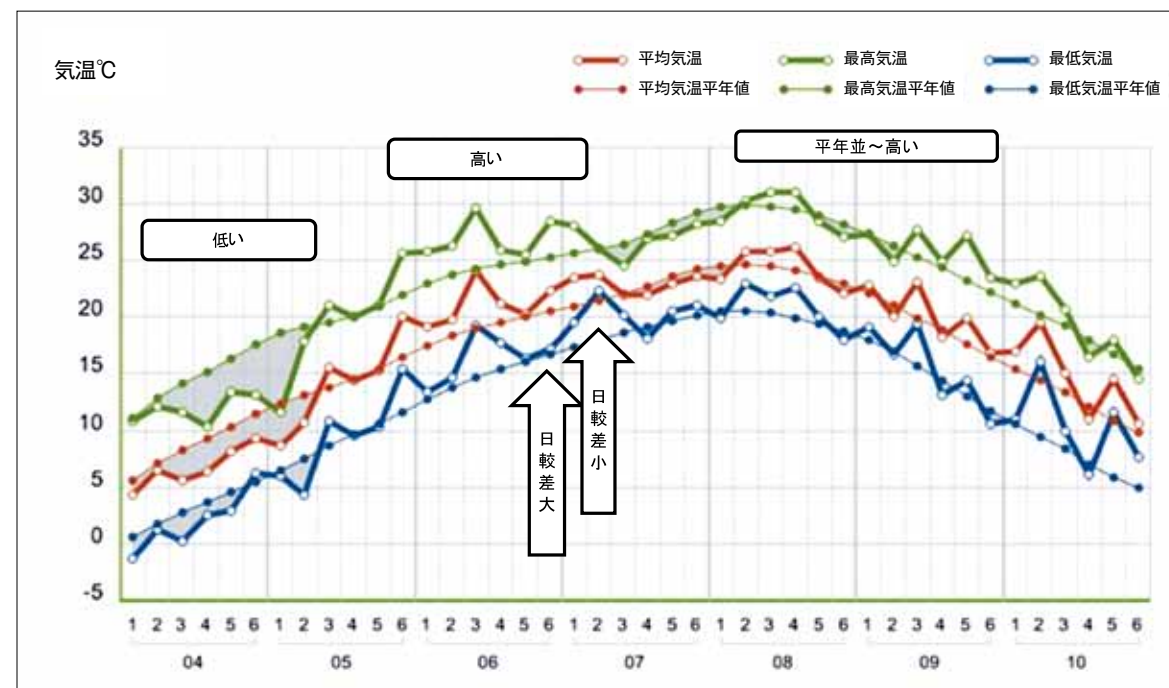
安心のネットワーク
NOSAI仙北

平成25年12月発行

監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課

■平成25年度総括版■

平成25年気象経過 アメダスポイント大曲



※今年の生育概況 & 作柄概況を次ページに掲載しておりますので、ご覧下さい。

■ 稲作生育概況 ～仙北地域振興局農業振興普及課
水稻定点調査結果より～

今年も寒い春でした。

低温の影響により春作業は全般的に遅れ、播種盛期は平年より2日遅い4月25日となりました。この寒さは5月上旬まで続き、播種後の育苗箱の温度が上がりにくく、無加温出芽では例年より出芽まで時間がかかりました。また苗の生長も緩慢で、田植え作業も平年より遅くなりました。（田植え始期：5月21日（平年より5日遅い）、田植え盛期：5月26日（平年より4日遅い）、田植え終期：6月5日（平年より8日遅い））

活着、生育は良好

田植えにあたる5月中旬ころからは気温も高く、活着は概ね良好でした。6月10日の定点調査では2日遅れの生育であったものの、有効茎決定期である6月25日には生育が平年並みまで回復しました。

7月の多雨、日照不足の影響で、十分な中干しができず弱勢茎の抑制が不十分となりました。また草丈が急伸長し、幼穂形成期には草丈が長く、生育量も多くなり、穂肥を控えるほ場もありました。

登熟期には断続的な降雨

登熟期間は断続的な降雨がありました。稈長が長かったことと、十分な中干しができなかったことなどから、平年に比べ倒伏した圃場が目立ちました。

刈取始期、盛期は平年並みの9月21日、9月29日、終期は平年より3日早い10月6日となりました。これは稲刈り時期が概ね好天に恵まれたためと考えられます。

■ 作柄概況

～県南地域の作況指数は「100」、収量は580kg/10a～

平成25年12月6日に東北農政局秋田地域センターが公表した資料によると、秋田県の収量は572kg/10aで作況指数100、県南地域の収量は580kg/10aで作況指数が100となりました。

～総籾数は平年並、登熟歩合が高い（定点調査ほ）～

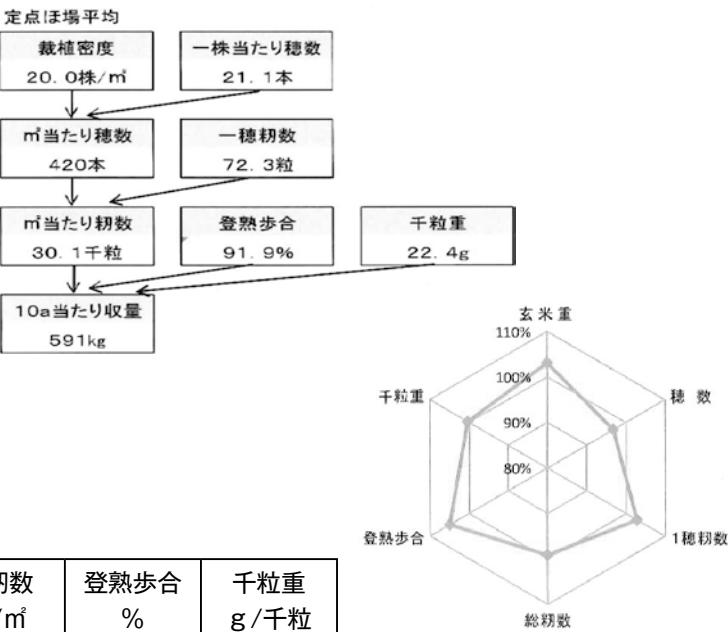
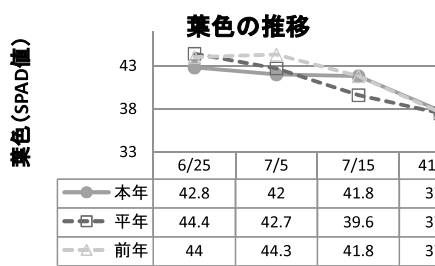
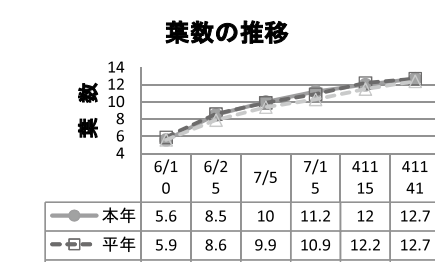
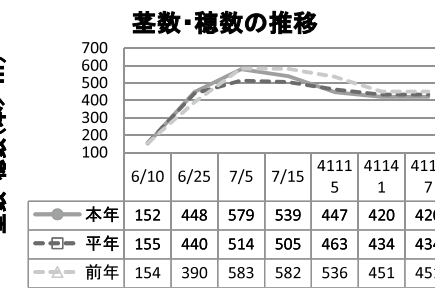
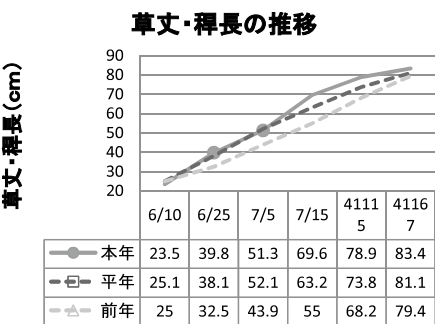
水稻定点調査ほ（あきたこまち、管内10地点）の玄米収量は591kg/10a（篩目1.9mm）で平年よりやや多い（平年比103%）結果となっています。

m²当たり穂数はやや少ないものの一穂籾数はやや多く、総籾数は平年並です。登熟歩合が高く、その結果、玄米重はやや多くなっています。

また、J A秋田おばこの12月11日現在の1等米比率は98.8%と非常に高くなっています。

定点収量及び収量構成要素

	玄米重 kg/10a	穂数 本/m ²	1穂籾数 粒/穂	総籾数 粒/m ²	登熟歩合 %	千粒重 g/千粒
本年	591	420	72.3	30,104	91.9	22.4
平年比（%±）	103%	97%	103%	99%	+4.3	100%
前年比（%±）	103%	93%	111%	103%	+1.5	99%



○25年産米の課題を分析します。～耕種的な対策で“天候に負けない稲づくり”を実践しましょう!!～

一次年度対策①～ 栽植密度は適正に～

- ・田植機の進歩や省力化の技術として、栽植密度が低下傾向にあります。使用苗箱数が少なくすむなど疎植のメリットはあるものの、リスクも潜んでいます。その一つは欠株が多くなることです。全農あきた米穀部や農業試験場の調査では、疎植にするほど欠株（株当たりの植え込み本数の減少）になりやすく、結果的に穂数不足となり、収量の減少を招くこととなります。また、疎植にすると生存のために稲の生長は旺盛になりますが、弱勢茎の増加を招き、m²あたりで換算すると、穂数が少なくなる傾向になることも分かってきました。安定生産のため、栽植密度は70株/坪(21.2株/m²)を基本として、極端な疎植栽培は避けましょう。

図1 栽植密度と植え込み本数

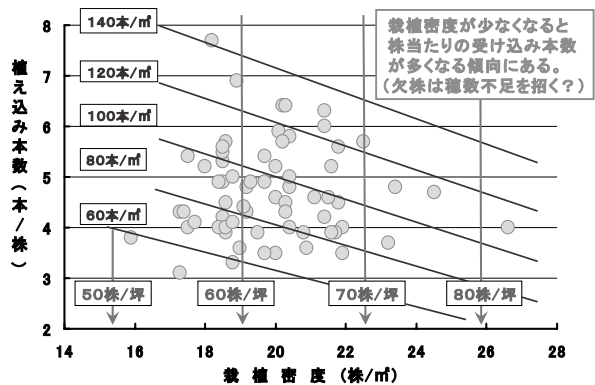
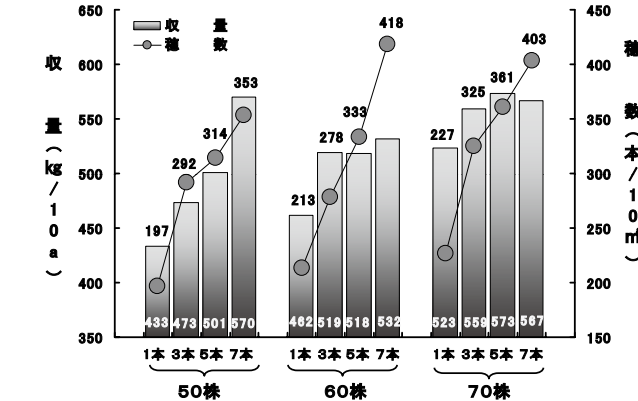


図2 栽培密度・植込本数別、収量・穂数の比較



一次年度対策②～ 弱勢茎を減らし、強勢茎を主体に～

- ・今年度は6月下旬の気温日較差が大きく、日照も多い気象の影響で分げつが非常に旺盛となりました。また、7月は降水量が多く、中干しや溝切りの作業が困難だったため、結果的に弱勢茎の発生が多くなりました。近年は中干しの時期が遅い傾向にありますが、茎数415本/m²（70株では20本/株、60株では23本/株）を確保ししだい、6月下旬には中干しを行うようにしましょう。なお、過度の分げつを抑える方法としては、葉齢で8.5～9.5葉期に深水管理（水深15cmに保つ）で抑える方法もあります。この方法は今年度のような多雨が予想される場合や排水不良田などでは中干しよりも確実な方法です。

高品質・安全生産のための水管理体系

